

古墳時代の耳飾り

Earrings of Kofun Period

上田 薫

UEDA, Kaoru

I はじめに

街行く奇抜な服装をした男性の若者の耳に光る金属製の耳飾り。男性が派手な耳飾りをする。このことはごく通俗的なファッションとして社会に認知されて久しいが、団塊の世代・全共闘世代の末端に属する筆者にとっては、長髪にはほとんど抵抗を感じないが、男性の染髪・耳飾りに関しては今だ素直に容認できないわだかまりのようなものがある。

振り返ってみればわが国の歴史上、男性がその服飾において華美を競ったいくつかの時代があった。もちろんそれはごく一部の階層に限られたが、時代を遡って列挙すれば、古墳時代の支配者層、平安時代の公達、源平の若武者、南北朝時代の婆沙羅大名、安土桃山時代の歌舞伎者、江戸時代の町火消等々、その当時として精一杯の自己主張を彼らは人目を引く服飾にゆだねたのである。



図1 現代の耳飾り

さて、男性の若者のファッションで特に筆者が興味を覚えるのは、リング状の金属製の耳飾りである（図1）。モデルの装着している耳飾りはピアス式で環が細く小振りではあるが、これとほぼ同様のものが古墳時代にも存在したことをご存知であろうか（図2）。図2は、神奈川県相模原市の上依知古墳群^{かみえち}からの出土品である。

それ以前もそれ以降も、こうした形状の金属の耳飾りはわが国の歴史上存在したことはない。古墳時代から千数百年の時を隔てて、まるで先祖返りのごとく平成の時代に忽然と姿を現すのである。



図2 古墳時代の耳飾り

II 古墳時代の時代的背景

それでは古墳時代とは、一体どのような時代であったのだろうか。認識を共有するため簡単に触れておくこととする。

古墳時代の年代的幅は、考古学的に3世紀中頃から8世紀初頭頃までととらえられている。この時代は周知のとおり、日本列島各地に前方後円墳をはじめとする大小様々な古墳が盛んに築かれた時代であり、時代の名称もそれに由来する。それと同時に、後の中央集権的律令国家や古代天皇制の基礎が築かれる、わが国

にとって国家形成期にあたる極めて重要な時代でもあった。

また広く東アジアの視野から鑑みれば、4世紀に始まる北方騎馬民族の南下・侵入により中国は南北に分裂する南北朝時代を迎え、この影響を受けた高句麗ははじき出されるがごとく朝鮮半島を南下する政策を進め、南の百済・新羅・加耶諸国を戦乱に巻き込むこととなる。結果的にこのことが大きな要因となり、中国大陸や朝鮮半島からおびただしい数の渡来人が戦乱を逃れてわが国に移り住むこととなるのである。

大陸の戦乱はわが国にとっても国家存亡の危機であったが、渡来人により東アジアの様々な先進文化がもたらされる結果ともなった。渡来人のもたらした技術を代表するものとして、巨大な古墳の築造や、灌漑用の大きな池を掘削する土木技術があげられる。鉄製の農具を普及させたのも彼らであり、これにより水田が飛躍的に増加し、農業生産が著しく高まったと考えられている。これまでとは異なった、本格的な窯を使用した薄くて硬い須恵器と呼ばれる焼き物の技法も彼らによりもたらされた。新式の武器や武具、馬具、装身具などの精密な金属加工技術も伝わった。機織りにも新規の技術が伝わり、絹織物の品質が飛躍的に向上した。そして物づくりの技術だけではなく、天文・暦・算術・文字などの多くの分野の学問ももたらされたのである。古墳時代とはこのような時代であった。

Ⅲ 古墳時代以前の耳飾り

本題に入る前に、古墳時代以前の耳飾りについて概観しておく。

わが国における耳飾りの歴史は古く、縄文時代前期（約6,500年前）には間違いなく存在したようである。このころの代表的な耳飾りは、^{けつじょう} 玦状耳飾と呼ばれる平らな丸い環の一箇所に切れ目が入れたもので（図3）、滑石や蛇紋岩などの比較的軟質で加工しやすい石が素材として用いられている。

ちなみに図3は、神奈川県海老名市上浜田遺跡出土の滑石製の玦状耳飾りである。この耳飾りは当時の墓と考えられる墓壙内で2個が一对で発見される例が多く、両耳に装着していたと考えられている。

玦状耳飾りの呼称は、古代中国の玉器の^{けつ} 玦と形が類似していることから名付けられている。これを装着したのは女性であったとされている。耳飾りを身に着けることにより呪術的な力を得られると考えられたのであろうか、いずれにせよシャーマン的存在の女性だったのであろう。

縄文時代中期（約5,000年前）以降になると、粘土



図3 玦状耳飾り

をこねて形を整えて焼いた、土製の耳飾りが盛んに作られ全国的に普及する。耳栓^{じせん}と呼ばれるこの耳飾は、耳たぶに孔を開けて差し込んだものである（図4）。図4は、いずれも神奈川県津久井町青山開戸遺跡^{あおやまかいと}出土の土製耳飾りで、左は円盤状、右はリング状を呈する、縄文時代晩期の製品である。



図4 耳栓

縄文時代の耳飾りは、いずれも耳たぶに孔を開けて装着するピアス式である。直径8cm近くの耳飾りも存在し、現在では考えられないくらいに耳たぶが大きく広がっていたことになる。幼少の頃に耳たぶに小さな耳飾りを装着し、年齢を経るにしたがって少しずつ孔を広げ、より大きなものを着けたとも考えられる。縄文人にとってそれが自己の美を顕示する一つの方法であったのかも知れない。ただしあまり大きく耳たぶを広げると、耳飾りをはずした際に耳たぶは紐のように垂れ下がってしまい、現代の感覚ではいささかグロテスクなものとなる。

縄文時代の耳飾りの伝統は、晩期終末（約2,500年前）に姿を消す。このことに至る要因としては、耳飾りを装着する儀礼が消滅したことによると考えられて

いる。

次の弥生時代になると、耳飾りの出土例はほとんど認められなくなる。耳飾りを装着する風習が、ここでもほぼ途絶えたことが明らかである。

ここで余談となるが、日本人は大きく南アジア系の縄文人的日本人と東北アジア系の弥生人的日本人に分かれる。縄文人的日本人は、やや背が低くがっしりとした体型で、四角張った顔で毛深く眉毛が太く、二重まぶたで中高の鼻を持ち、唇が厚く大きな耳たぶを持ち、寒さに弱い。一方弥生時代的日本人は、ややゆ背が高くほっそりとした体型で、面長の顔で毛深くなく細い眉毛で、一重まぶたでやや扁平な鼻を持ち、唇が薄く耳たぶが不明瞭で、寒さに強い。現代の日本人は両者の折衷タイプがほとんどであるが、縄文人・弥生人の特徴を良く残した人も多く存在する。

問題は縄文人と弥生人の耳たぶの違いである。南アジア系の縄文人耳たぶは広く、東北アジア系の弥生人の耳たぶは狭く小さい。したがって、弥生人の耳には縄文人のような大きな耳飾りを装着することが容易ではなかったとする考え方もある。

Ⅳ 古墳時代の耳飾り

5世紀代になると、朝鮮半島の諸国との交流が極めて活発となり、それに伴い5世紀中頃に特に新羅を中心に出現した金製品が、わが国に大量に流れ込んでくる。当時の権力者たちは競ってこれら装身具を身にまとうようになる。耳飾りもこの時期に形を変えて再び登場することとなる。

頭にかぶる冠とセットになるいかめしい装身具として、朝鮮半島で製作された垂れ飾りを付けた耳飾りが出現するのはこのころである。耳たぶにはめるリングに、飾りの付いた1本から数本の鎖を垂らしたもので、極めて精巧に作られ当時の彫金の技術水準の高さを物語る(図5)。歩くたびにこれら鎖と飾りがゆらめいて、心地よい金属音がほのかに響いたことを想像するに難くない。ただしこれを装着した者は権力者の中でもごく一部に限られていた。図5左は滋賀県鴨稲荷山古墳出土、右は熊本県江田船山古墳出土の著名な金の耳飾りである。

当時比較的幅広い階層に使用されたのが、金銅製^じ耳環^{かん}と呼称される耳飾りで、これは古墳時代の最も普遍的な装身具の一つとして知られている。

古墳や、丘陵の斜面や崖を利用してそこをトンネル状に掘り進んで構築された横穴墓を発掘調査すると、ごく普遍的に出土する遺物である。筆者のフィールドとする神奈川県内においても、出土例は数百個にも及



図5 垂れ飾りを付けた耳飾り

ぶ。筆者自身も横穴墓の発掘調査で、これまでに10個前後を掘り出している。

横穴墓の玄室の中で、発電機に頼った薄暗い裸電球の光りの下、床に堆積した土を竹箆で慎重に除去し、骨や歯などに混ざって土の中から金色にきらりと光る金銅製耳環を初めて検出したときの感動は、今でも忘れることがない。発掘調査にたずさわるものだけが味わえる貴重な経験である。

なお耳環は、副葬品として鏡や刀のごとく遺体に添えられて古墳や横穴墓内に納められたのではなく、勾玉等の玉類がネックレスとして首に巻かれていたようにと同様に、遺体の耳に装着されていたものである。

耳環の多くは4～8mm程の棒状の銅を素材とし、これを曲げて外形2～3cm内外の一方に開きを持つ環に仕上げたもので、この表面には金鍍金が施されている。数は少ないが銀鍍金が施された例も認められる。鍍金を行う技術が、古墳時代まで遡ることをご存知ない方が多いのではなからうか。大きさと厚さは大小がある(図6)。



図6 金銅製耳環

図6は筆者が調査した、神奈川県足柄上郡中井町所在の比奈窪中屋敷横穴墓群より出土した金銅製耳環である。左は径2.6×2.8cm、環厚0.75×0.7cmを測り、重さ16.2g、右は径1.7cm、環厚0.4×0.3cmを測り、重さ2.4gを量る。大きさは必ずしも画一的でなかったことが判る。

先に述べたように、縄文時代の耳飾りはシャーマン的存在の女性が付けたであろうと考えられているが、この時代の耳飾りは男女を問わず付けていたことは間違いない。ではどうしてこのことが断定できるのだろうか。それは埴輪の存在である。

埴輪は古墳の上や周りに立て並べた葬送儀礼用に作られた土製品で、ご存知のように円筒埴輪と形象埴輪に大別される。形象埴輪の中の人物埴輪が製作されるようになったのは5世紀の中頃で、当初の素材の対象は男女の呪い師に限られたが、次第に様々な人物が対象となった。ギリシャやローマの彫刻と比較すると、当然ながら素朴で稚拙さは否めないが、人物埴輪は当時の人々の様相、とりわけファッションをうかがい知る上で重要な情報を時空を超えて我々に提供してくれる。そして人物の性別の差異が明瞭に示されている。その中には、耳飾りを付けた男女の埴輪が存在し、装着の実際が忠実に表現されている。ここで、耳飾りをつけた代表的な人物埴輪を何点か取り上げてみたい。

V 埴輪に表現された耳飾り

まず男子像から。図7は、福島県いわき市出土の、鈴付きの底のある派手な冠をかぶった男子像。左右に振り分けられ、朱色の線で紐が表現されたみずらの下から垣間見えるのは耳環である。

図8は、群馬県伊勢崎市出土の男子像。尖った帽子を被り、農夫像と考えられている。大きく表現された耳環が特徴的である。

図9も、群馬県伊勢崎市出土の男子像。これも帽子を被り、左右に振り分け束ねられた髪の下に大きな耳環が垂れ下がっている。口元に笑みをたたえ、農夫像とされている。

続いて女子像。図10は、群馬県太田市出土の女子像。大きく扁平な島田髷を結い、頭頂部で束ねられている。巫女を表現したものと考えられ、耳飾りと首飾りを装着している。巫女の埴輪は比較的出土例が多い。

図11は、出土地不詳の女性像。これも図10と同様これも巫女と考えられる。同じく耳飾りと首飾りを装着している。額の上に表現されているのは櫛であろうか。

図12は、群馬県伊勢崎市出土の女子像。礼装の女子像として極めて著名である。図では頭部だけを掲載し



図7 埴輪男子像



図8 埴輪男子像

たが本来は全身像で、着衣には裳が表現されている。ヘッドバンドのようなものが額をめぐり、大きな島田髷を結っている。前髪に刺さるように表現されているのは明らかに櫛である。大ぶりの耳飾りと首飾りを装着している。高貴な身分の女子像と考えられている。



図9 埴輪男子像



図10 埴輪女子像



図11 埴輪女子像



図12 埴輪女子像

以上、この時代には現代と同様、男女を問わずごく普遍的にリング状の耳飾りを付けていたことをご理解いただけたと思う。これに対して首飾りは埴輪で見限り、女子像に表現されたものが男子像よりやや上回るようである。なお、図示した埴輪でおわかりのように、耳環は一对を両耳に装着するのであって、今の若者のように片耳に複数装着するようなことはしない。

さて、この耳環の装着方法については、耳たぶに両側から挟み込むクリップ式か、耳たぶに穴を開けて通すピアス式の二方法が考えられる。

図5を再度ご覧いただきたい。垂れ飾りを付けた耳飾りであるが、これを簡略化し垂れ飾りの部分を取り除いた環だけのものが耳環である。余分な装飾を取り除くことで緻密な技術が必要となくなり、大量に生産することが可能となり、幅広く流通し普及していったのである。

垂れ飾りを付けた耳飾りは、耳たぶに両側から挟み込むクリップ式であったと考えられる。ピアス式であると、垂れ飾りが環の切れ目から落下する可能性が大きいからである。

耳環は垂れ飾りを付けた耳飾りを簡略化したものであるから、その系譜を受け継いでクリップ式であったと筆者は以前より推察していた。また稚拙ではあるが、人物埴輪に見られる装身具類は極めて実物に近い表現が成されており、これに認められる耳環には環の切れ目が示された例が皆無であることもこの裏付けとなると考えていた。実際に環の切れ目の幅は狭く、何も耳に孔を開けて装着しなくとも、挟み込むだけで対

応が可能なのである。

ところが筆者の考え異なり、耳環がピアス式であったことを証明する重要な資料が存在することを最近知るに至った（杉山2003）。千葉県の大塚古墳から出土した人物埴輪の両耳には上下にそれぞれ二つの孔が開いている（図13）。上の大きな孔は耳穴で、下の小さな孔はピアス式装着法で耳環を取り付けるための孔であったと杉山は指摘する。さらに杉山は京都広隆寺の弥勒菩薩の耳たぶに大きな孔が開いていることに注目し、作られた当初はそこから耳環が垂れ下がっていたであろうと推理し、仏像の耳に孔が開いている例はこれにとどまらなると述べている。



図13 耳たぶに穴のある人物埴輪

果たしてこのことで問題が解決したのであるか、筆者には疑問が残る。たとえば筆者の耳たぶの厚さは約5mm、耳環の環の切れ目は概ね1～3mm。クリップ式で装着しても、よほどの動きをしない限りはずれることはなからう。また、垂れ飾りを付けた耳飾りからのクリップ式の系譜も簡単には無視できない。さらにこの時代の後の、仏像に耳に関する見解に関しては、広く仏像の歴史的系譜から考察する必要を感じる。したがって、一部にピアス式が採用されたが、主流はクリップ式であったと考えている。

Ⅵ おわりに

装身具を直接身体に着装する習俗は、律令制が成立する7世紀後半以降の、唐の服装習俗の導入普及により断ち切れ、以後明治時代の西洋風習俗が伝播するまで耳飾りはわが国から姿を消す。

この間、女性に関しても、また最初に触れた平安時代の公達、源平の若武者、南北朝時代の婆沙羅大名、安土桃山時代の歌舞伎者、江戸時代の町火消等々の男性も、耳飾りに限らず装身具の類を身につけることがなくなる。女性には櫛や簪を髪にさす風習が残った

が、それ以外で装身具として思い付くのは、キリスト教伝来に伴ってごく一部に普及したロザリオぐらいであろうか。装身具千数百年の空白の謎には実に興味が尽きない。

最後に一言。耳はともかく、臉や、小鼻、唇、舌にリングを装着した若者を見かける。一つの自己顕示欲なのであろうが、これはかつて刺青の苦痛に耐え忍ぶことを誇りとしたその筋の異端者と同様の、単なる自虐的なバーバリズムに他ならない。

参考文献

- 猪熊兼勝 「埴輪」『日本の原始美術6』講談社 1979
上田 薫他 『比奈窪中屋敷横穴墓群』かながわ考古学財団調査報告136 2002
神奈川県教育委員会 『当麻遺跡・上依知遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告12 1977
神奈川県教育委員会 『上浜田遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告15 1979
神奈川県立埋蔵文化財センター 『代官山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告11 1986
神奈川県立埋蔵文化財センター 『耳飾と古代のモード』 1997
金関恕・小野山節 「武器 装身具」『日本原始美術大系5』講談社 1978
近藤義郎 『農民と耳飾り』青木書店 1983
財団法人かながわ考古学財団『青山開戸遺跡』かながわ考古学財団調査報告29
杉山晋作 「埴輪こぼれ話」『歴博ブックレット26』（財）歴史民族博物館振興会 2003
高橋克壽 「埴輪の世紀」『歴史発掘9』講談社 1996
橋本博文 「人物埴輪にみる装身具」『考古学ジャーナルNo357』ニューサイエンス社 1993
春成秀爾 「古代の装い」『歴史発掘4』講談社 1997
樋口清之編 「古墳とはにわ」『原始日本の再発見』学習研究社 1978
町田 章 「装身具」『日本の原始美術9』講談社 1979